

中国正史に関する暦日データの整理

——『日本書紀』との比較を目的として——

小 島 莊 一

はじめに

本稿は『日本書紀』（以下、『書紀』と記す）の暦日データと比較することを目的として、筆者がこれまでに集計を行ってきた中国正史に関する暦日データをまとめたものであり、論考というよりもデータ集といった性格に近いものである。

筆者はこれまで、『書紀』の記事に付された暦日（紀年）が、どのようにして編纂されたものであるのかを考察してきた。その結果、暦日は『書紀』の完成時にはどのように記されていたのか^①、また、それらはどのような段階を経て編纂されたのか^②、という問題について、一定の成果を収めることができたものと考えている。

しかし、これまでの検討は、基本的には『書紀』のみを考察の対象としており、言ってみれば『書紀』の中だけで完結している性格のものであった。今後、『書紀』の暦日に関す

る考察をさらに進めていくためには、他の歴史書の暦日についても考察を行い、『書紀』との間の比較を行っていくことが不可欠であると考えられる。本稿はその考察に進むための言わば準備作業のようなものと位置付けられる。

具体的に暦日データの集計を行っている歴史書は『史記』から『隋書』までの中国正史のうち、南北朝時代の北朝系の正史と、通史的性格を持つ『南史』、『北史』を除いた十史である^③。以下、各正史の簡単な説明を行っておくことにしたい。なお、正史は多くの場合、紀伝体と呼ばれる「本紀」、「志」、「列伝」などの様々な部分によって構成されているが、本稿で暦日をデータとして集計しているのは本紀（帝紀）の部分だけである。

① 『史記』（卷八・高祖本紀、卷十二・武帝本紀）『史記』の本紀は、伝説上の夏代や殷代・周代など極めて長い時間的範囲を含んでいるが、漢代よりも古い時代につい

ては記事に暦日が殆ど付されていないため、巻七・項羽本紀以前については考察の対象には含めていない。^④よってデータを集計しているのは、巻八・高祖本紀からである。なお、最後の巻十二・孝武本紀については、暦日の記載が極めて不徹底であるが、本稿では考察の対象に含めた。(対象範囲、紀元前二〇九～紀元前九八年)^⑤

② 『漢書』(巻一・高帝紀～巻十二・平帝紀)

『漢書』の帝紀には高帝から平帝までの全一二紀が存在しており、含まれる時間的範囲も記事の分量も、かなりの大部である。^⑥また、全一二紀の中の巻一・高帝紀から巻五・景帝紀までは、先行する歴史書である『史記』において扱われている時代と重複しているため、具体的な比較が可能である。(対象範囲、紀元前二〇九～紀元五年)

③ 『後漢書』(巻一・光武帝紀～巻十・孝献帝紀)

『後漢書』の帝紀は全一〇紀から成っているが、帝紀の中で名前を立てられている皇帝は全一二代に及んでいる。しかし孝殤帝紀、孝冲帝紀、孝質帝紀の三帝紀については時間的範囲が一年程度にしか及んでいないため、単独で検討を行うことは困難であると考えられる。そのため本稿第二節以降では単独で集計は行わず、他の帝紀とまとめて暦日データを集計している。(対象範囲、紀元二二年～三二二年)

④ 『三国志』魏書(巻一・武帝紀～巻四・三少帝紀)

『三国志』は三世紀末に成立した歴史書であり、その成立は宋代(五世紀前半)に入ってから完成した『後漢書』よりも相当に古いものである。^⑧このため、記事に付された暦日の長期的な変遷をデータとして集計していく場合には、或いは歴史書の成立順を重視して『三国志』を『後漢書』よりも前に置くべきなのかもしれない。しかし本稿では、その対象としている王朝の順序に並べておくこととする。

また『三国志』の内容は「魏書」、「呉書」、「蜀書」の三書からなっているが、帝紀が存在しているのは魏書のみであり、いずれもほぼ同時代のことを記しているため、本稿では魏書のみを集計の対象としている。(対象範囲、紀元一八九～二六五年)

⑤ 『晋書』(巻一・宣帝紀～巻十・恭帝紀)

『晋書』の帝紀は、全一〇帝紀から成立しているが、実際に在位した皇帝は一八代にも及ぶ。しかし文帝、明帝、康帝、簡文帝、恭帝については治世年数が極めて短く、単独で集計を行うことが無意味であるため、本稿ではこれらの五帝紀は他の皇帝紀と暦日データをまとめ、それ以外の一三皇帝を基本単位として集計を行っている。(対象範囲、紀元二二一～四二一年)

⑥ 『宋書』(巻一・武帝本紀～巻十・順帝本紀)

『宋書』の本紀は、巻一・武帝本紀から巻十・順帝本紀に

到る一〇本紀によって構成されているが、実際に名が立てられている皇帝は八代であり、最初の三本紀はすべて初代武帝の治世を取り扱っている。¹⁰⁾ よって本稿では、それぞれの皇帝を基本単位として、八項目で暦日データの集計を行っている。(対象範囲、紀元三九九～四七九年)

⑦ 『南斉書』(巻一・高帝本紀～巻八・和帝本紀)

『南斉書』の本紀は全部で八本紀から成っているが、実際に即位している皇帝や王などは七代である。¹¹⁾ これは初代の高帝の治世が、上下巻として二本紀に分けて記載されているためであるが、このため本稿での暦日データの集計も、皇帝ごとを基本単位として七項目で集計している。(対象範囲、紀元四二七～五〇二年)

⑧ 『梁書』(巻一・武帝本紀～巻六・敬帝本紀)

『梁書』の本紀は、全六本紀によって構成されているが、実際に名前が立てられている皇帝は四代である。¹²⁾ これは初代武帝の治世が、巻一から巻三までの三本紀にわたって記載されているためであり、本稿では皇帝の数に従って四項目として暦日データの集計を行っている。(対象範囲、紀元四九五～五五七年)

⑨ 『陳書』(巻一・高祖本紀～巻六・後主本紀)

『陳書』には合計で六つの本紀が存在しているが、初代高祖の時代に関する本紀が上下二巻にわたって、巻一と巻二に

記載されているため、実際に即位した皇帝は五代である。¹³⁾ よって他の歴史書と同様に、本稿では皇帝の数を基本単位として五項目で暦日データの集計を行っている。(対象範囲、紀元五三五～五八九年)

⑩ 『隋書』(巻一・高祖帝紀～巻五・恭帝紀)

『隋書』の帝紀は全部で五つの帝紀から成っているが、実際に名が立てられている皇帝は三代である。これは初代の高祖と二代目の煬帝の帝紀が、それぞれ二巻ずつに分けて記載されているためであるが、本稿では三項目にまとめて暦日のデータを集計している。¹⁴⁾ また、三代目の恭帝紀に関しては独立して集計を行っているが、時間的範囲が極めて短いために、実質的には高祖帝紀と煬帝紀が『隋書』の帝紀のほぼすべてを形成しているということができるとであろう。(対象範囲、紀元五四一～六一九年)

一、各月の累計と割合

本節では集計データのうち、各月の累計(これを各月累計と仮称する)と各月の相対的な割合(これを各月率と仮称する)を取り上げる。各月累計とは、一つの歴史書、或いは一つの本紀(帝紀)、または複数の本紀によるグループの中で、各記事がどのような月に配置されているのかを累計したもの

表1 『史記』『漢書』（秦正期）各月累計と各月率

本紀・帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
『史記』高祖	3	3	1	2	1	2	2	2	1	4	2	3	0	26
呂太后	1	1	1	2	1	1	1	3	2	4	2	1	1	21
孝文	2	0	2	1	2	2	1	1	2	3	2	2	0	20
孝景	3	3	8	7	3	3	2	3	2	4	1	1	2	42
孝武	0	0	1	2	1	1	0	0	0	0	2	1	0	8
『漢書』高帝	7	10	7	8	9	8	8	9	11	12	10	10	2	111
惠帝	5	0	1	1	3	2	3	2	2	5	0	1	0	25
高后	3	1	0	1	3	3	2	2	2	0	0	1	0	18
文帝	5	4	5	8	6	6	2	1	4	6	4	4	1	56
景帝	7	4	5	8	4	6	5	1	5	5	2	4	0	56
武帝・前半	5	6	11	14	10	9	5	4	6	13	8	4	0	95
累計	41	32	42	54	43	43	31	28	37	56	33	32	6	478
各月率(%)	8.7	6.8	8.9	11.4	9.1	9.1	6.6	5.9	7.8	11.9	7.0	6.8	3.4	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 武帝紀前半とは、夏正による暦法が導入される太初元（紀元前104）年までのことを指す。

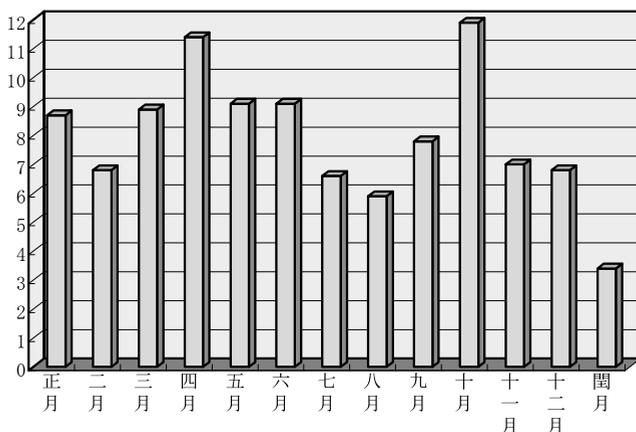


図1 『史記』『漢書』（秦正期）各月率(%)

表2 『漢書』(夏正期) 各月累計と各月率

帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
武帝・後半	13	5	9	6	5	4	3	2	4	1	2	2	1	57
昭帝	7	5	3	4	1	8	5	3	2	2	2	1	1	44
宣帝	14	8	14	12	10	6	3	6	4	3	5	8	0	93
元帝	9	5	12	7	1	9	4	3	2	1	2	4	1	60
成帝	16	12	15	10	4	9	5	7	5	2	4	6	2	97
哀帝	4	3	6	3	3	5	1	2	2	0	1	0	0	30
平帝	3	2	0	1	1	2	1	0	3	0	0	1	1	15
累計	66	40	59	43	25	43	22	23	22	9	16	22	6	396
各月率(%)	16.7	10.1	14.9	10.9	6.3	10.9	5.6	5.8	5.6	2.3	4.0	5.6	4.0	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 武帝紀後半とは、夏正による暦法が導入された太初二(紀元前103)年からのことを指す。

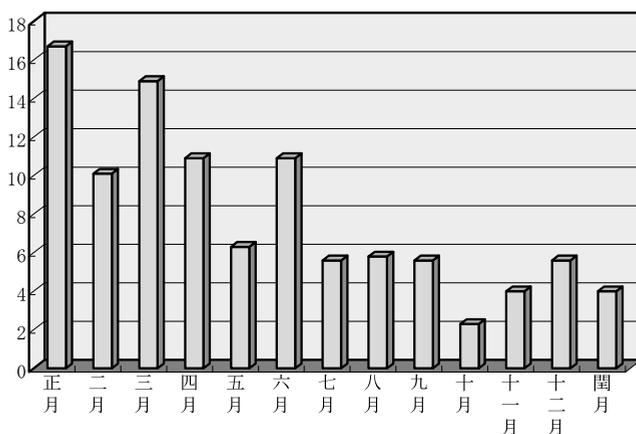


図2 『漢書』(夏正期) 各月率(%)

表3 『後漢書』各月累計と各月率

帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
光武帝	27	19	15	20	18	16	12	11	15	21	12	18	6	210
孝明帝	9	11	9	10	5	4	4	5	4	8	6	8	1	84
孝章帝	8	7	8	7	6	7	6	7	6	6	6	6	2	82
孝和帝	10	12	9	13	10	11	13	6	12	12	9	9	5	131
孝殤帝	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0	8
孝安帝	15	15	15	15	13	16	16	8	16	13	12	14	3	171
孝順帝	12	13	10	11	10	7	13	9	9	11	13	11	5	134
孝沖帝	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	6
孝質帝	1	2	1	2	2	2	1	0	1	0	1	0	1	14
孝桓帝	16	11	13	15	14	13	20	8	8	15	16	10	6	165
孝靈帝	15	16	17	17	16	15	16	11	10	16	11	13	4	177
孝獻帝	15	8	11	8	11	11	12	12	11	13	9	8	0	129
累計	130	114	109	119	106	103	114	79	93	116	96	99	33	1311
各月率(%)	9.9	8.7	8.3	9.1	8.1	7.9	8.7	6.0	7.1	8.8	7.3	7.6	6.7	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いいため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 孝靈帝紀には少帝の治世期間が含まれているが、帝紀に名が立てられていないため名称は省略してある。

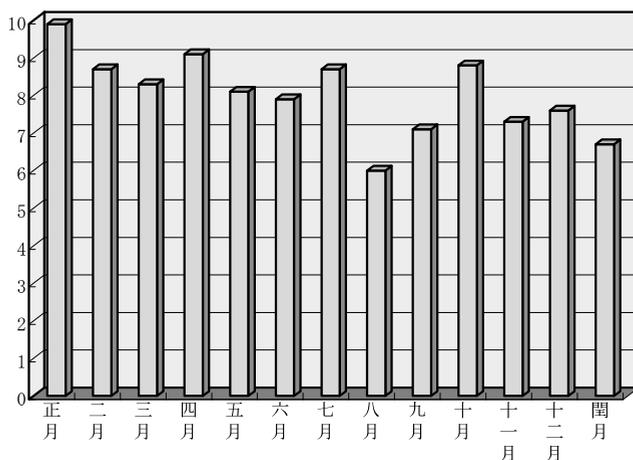


図3 『後漢書』各月率(%)

表4 『三国志』魏書、各月累計と各月率

帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
武帝	19	9	11	10	10	3	15	12	16	15	7	9	0	136
文帝	5	3	7	4	7	5	4	6	4	5	4	4	1	59
明帝	8	7	6	9	8	8	8	7	5	11	10	12	2	101
三少帝・齊王	6	11	5	8	10	4	7	6	3	3	5	12	0	80
高貴郷公	4	3	3	4	4	4	3	3	3	4	2	1	1	39
陳留王	1	4	1	2	4	2	2	3	3	4	2	3	1	32
累計	43	37	33	37	43	26	39	37	34	42	30	41	5	447
各月率(%)	9.6	8.3	7.4	8.3	9.6	5.8	8.7	8.3	7.6	9.4	6.7	9.2	3.0	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 齊王、高貴郷公、陳留王の記事は、三少帝紀として同一巻にまとめて記載されているが、本稿ではそれぞれ個別に集計を行った。

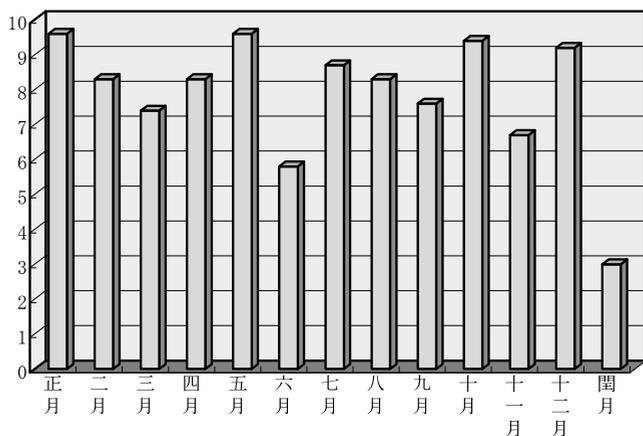


図4 『三国志』魏書、各月率(%)

表5 『晋書』各月累計と各月率

帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
宣帝	6	1	2	2	2	3	1	2	2	0	0	2	0	23
景・文帝	6	4	3	4	6	3	3	5	3	2	3	0	1	43
武帝	23	15	18	19	15	19	21	15	20	16	19	23	5	228
惠帝	13	4	9	12	11	11	9	12	11	10	8	8	1	119
孝懷帝	7	5	5	5	4	2	6	4	6	4	7	6	0	61
孝愍帝	3	3	4	4	5	4	4	4	4	4	2	4	0	45
元・明帝	6	6	8	7	8	8	9	8	3	7	5	4	3	82
成・康帝	16	11	14	15	8	11	11	13	10	13	8	12	1	143
穆帝	14	8	9	11	13	9	11	12	7	14	11	13	1	133
哀帝	2	4	3	3	4	0	4	4	3	3	2	2	0	34
海西公	4	3	4	7	2	2	4	3	4	7	5	3	0	48
簡文・孝武帝	19	12	15	13	13	18	17	15	17	14	13	12	2	180
安・恭帝	13	15	15	11	12	12	15	14	14	13	12	13	1	160
累計	132	91	109	113	103	102	115	111	104	107	95	102	15	1284
各月率(%)	10.3	7.1	8.5	8.8	8.0	7.9	9.0	8.6	8.1	8.3	7.4	7.9	3.2	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

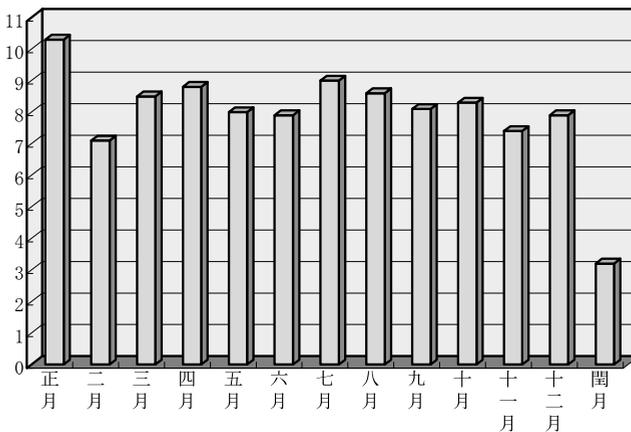


図5 『晋書』各月率 (%)

表6 『宋書』各月累計と各月率

本紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
武帝	12	9	10	8	8	7	8	6	9	10	7	9	2	105
少帝	1	2	1	1	1	2	1	0	1	1	1	2	0	14
文帝	25	18	16	21	20	21	21	19	12	13	13	15	7	221
孝武帝	11	11	8	10	10	9	12	11	10	11	10	9	5	127
前廢帝	1	1	1	0	1	2	0	2	2	2	1	1	0	14
明帝	7	7	7	7	6	5	6	5	6	5	5	6	2	74
後廢帝	4	4	3	3	4	6	6	5	4	5	4	4	2	54
順帝	2	2	2	2	2	2	0	2	2	1	2	2	1	22
累計	63	54	48	52	52	54	54	50	46	48	43	48	19	631
各月率(%)	10.0	8.6	7.6	8.2	8.2	8.6	8.6	7.9	7.3	7.6	6.8	7.6	8.0	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 少帝本紀、前廢帝本紀、順帝本紀などは、その範囲年数が極めて短いため、データ集計の上でも数値が小さく扱いにくい存在であるが、それぞれ単独に本紀を立てられているため、本稿では個別に集計した。

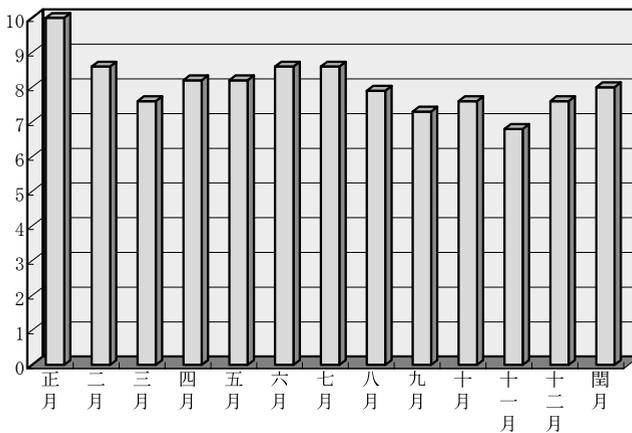


図6 『宋書』各月率(%)

表7 『南齊書』各月累計と各月率

本紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
高帝	5	3	4	4	3	3	5	0	2	3	2	2	2	38
武帝	11	7	7	10	8	9	8	9	7	7	5	5	2	95
鬱林王	1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	1	0	1	9
海陵王	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3
明帝	4	2	4	3	3	1	2	2	2	3	2	3	1	32
東昏侯	2	2	1	2	3	2	2	1	1	3	4	2	1	26
和帝	2	2	2	1	0	1	1	3	1	1	0	1	0	15
累計	25	17	18	21	17	17	19	17	14	19	14	13	7	218
各月率(%)	11.5	7.8	8.3	9.6	7.8	7.8	8.7	7.8	6.4	8.7	6.4	6.0	8.6	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 鬱林王本紀、海陵王本紀、和帝本紀などは、その範囲年数が極めて短いため、データ集計の上でも数値が小さく扱いにくい存在であるが、それぞれ単独に本紀を立てられているため、本稿では個別に集計した。

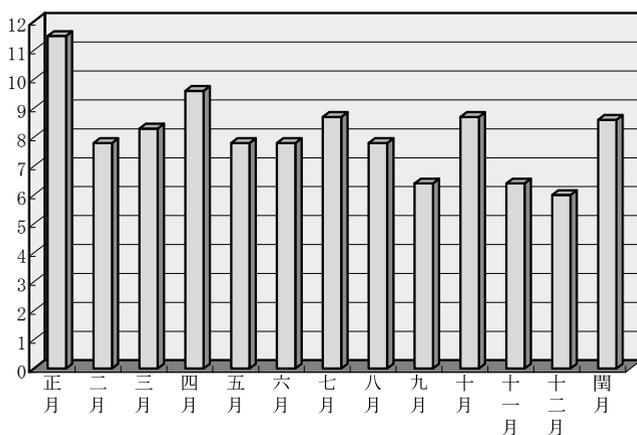


図7 『南齊書』各月率(%)

表8 『梁書』各月累計と各月率

本紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
武帝	45	37	41	40	30	33	29	31	24	29	28	25	8	400
簡文帝	1	2	2	3	4	3	4	3	1	4	1	1	1	30
元帝	4	3	5	6	4	4	3	4	6	3	5	4	0	51
敬帝	2	3	3	3	2	1	2	2	3	2	3	2	0	28
累計	52	45	51	52	40	41	38	40	34	38	37	32	9	509
各月率(%)	10.4	9.0	10.2	10.4	8.0	8.2	7.6	8.0	6.8	7.6	7.4	6.4	4.9	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いいため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 『梁書』においては初代武帝本紀の範囲年数が圧倒的に大きく、その他の簡文帝本紀、元帝本紀、敬帝本紀は範囲年数が短い。しかし、それぞれ単独に本紀を立てられているため、本稿では個別に集計を行っている。

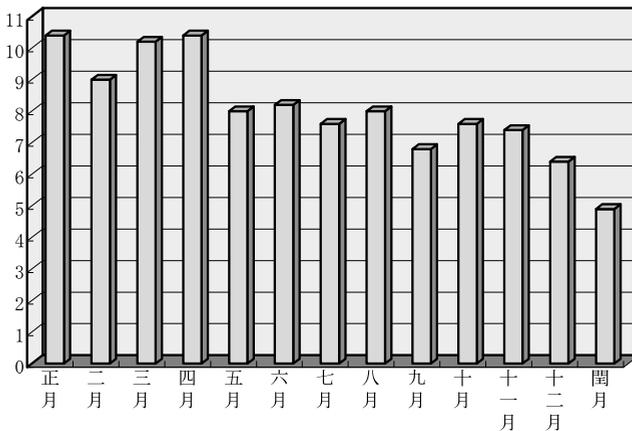


図8 『梁書』各月率 (%)

表9 『陳書』各月累計と各月率

本紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
高祖	6	5	6	2	5	6	4	5	3	5	6	4	1	58
世祖	6	4	7	7	3	6	7	3	7	3	4	5	1	63
廢帝	2	2	1	4	4	3	3	1	2	3	3	2	1	31
宣帝	14	13	9	10	12	11	6	9	9	11	10	12	3	129
後主	9	3	3	4	3	2	2	4	6	5	7	3	0	51
累計	37	27	26	27	27	28	22	22	27	27	30	26	6	332
各月率(%)	11.3	8.3	8.0	8.3	8.3	8.6	6.7	6.7	8.3	8.3	9.2	8.0	5.0	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 『陳書』においては全体的に範囲年数の短い皇帝本紀が多く、そのため数値の小さなケースが目立っているが、それぞれ単独で本紀を立てられているため、本稿においては個別に集計を行った。

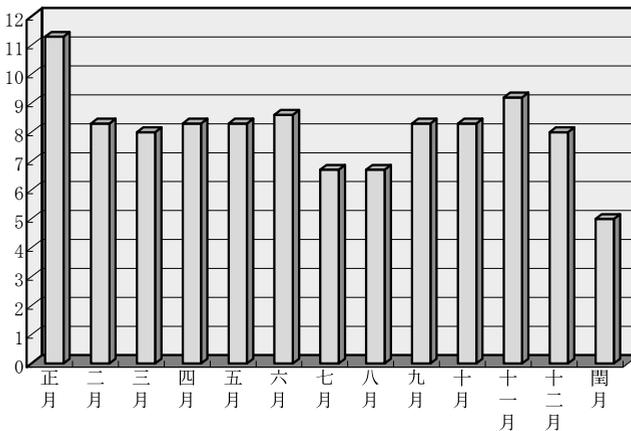


図9 『陳書』各月率 (%)

表10 『隋書』 各月累計と各月率

帝紀	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	閏	合計
高祖帝	19	20	13	21	18	16	20	20	18	17	18	16	6	222
煬帝	13	13	11	11	12	8	11	9	10	13	7	8	2	128
恭帝	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	5
累計	33	33	25	32	31	24	31	29	28	30	26	25	8	355
各月率(%)	9.3	9.3	7.0	9.0	8.7	6.8	8.7	8.2	7.9	8.5	7.3	7.0	6.0	

注1 各平月の割合は全体の合計の中から算出しているが、閏月は出現率が低いため平月と同等になるように換算してある。よって割合の合計は100%にはならない。

注2 恭帝紀は、その範囲年数が極めて短いため、データ集計の上でも数値が小さく扱いにくい存在であるが、単独に帝紀を立てられているため、本稿では個別に集計を行った。

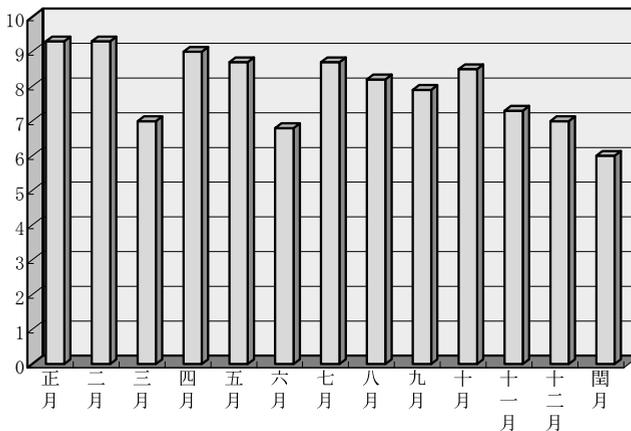


図10 『隋書』 各月率 (%)

である。ただし、同一月に複数の記事が存在する場合には一つとして集計している。換言すれば、それぞれの月が暦日として何回記されているかを集計したものである。

一方、異なる歴史書間で各月の使用傾向を比較できるように、各月の割合を相対的に数値化したのが各月率である。これは各月累計の合計の中で、それぞれの月が占めている割合をパーセンテージで表したものである。ただし平月は毎年必ず一回ずつ存在するが、閏月はおよそ三二ヶ月に一回程度しか存在しないため、平月と同等に比較できるように数値を換算してある。¹⁵⁾このため、各月率の合計は一〇〇%とはならない。この各月率によって各記事に付されている月名の、歴史書間における傾向の違いを比較することができるのである。

なお、基本的には一つの歴史書ごとに集計を行っているが、『史記』と『漢書』の時代に関してのみは、秦正（十月を歳首とする）から夏正（正月を歳首とする）への移行という、歳首をどこに置くかの暦法上の大きな転換が行われた時期であるので、歴史書ごとではなく、秦正期（表1、図1）と夏正期（表2、図2）とで区分して集計を行っている。

この各月累計や各月率によって考察される最大の特徴は、各月の記載頻度のばらつきである。『書紀』との比較を含めた詳しい検討は次稿に譲るが、基本的に年始の月は記載される傾向が高く、例えば秦正期の集計では歳首である十月が、

一方、その他の集計では夏正の年始である正月が最も各月率が高くなっている。逆に閏月では、各月率が最も低くなっている場合が多く、これは閏月というものが歴史書に記載されるために、記録として保存される割合が低かったことを示しているものと考えられるのである。

二、平月と閏月の記載率

本節では集計データの中から、平月の記載率（これを平月率と仮称する）と閏月の記載率（これを閏月率と仮称する）を取り上げたい。

これらは一つの歴史書、或いは一つの本紀（帝紀）、また複数の本紀によるグループ内に含まれる時間的範囲の全月中で、実際に記事に付されている平月・閏月の割合を算出したものである。例えば、ある本紀の時間的範囲が一〇年（二〇平月）で、その中に二四個の平月が記されていた場合には、その平月率は二〇・〇%となる。¹⁷⁾

この集計を用いて各本紀や歴史書における暦日の粗密性を追究することも不可能ではないが、本節の数値では月レベルまでの考察しきれないため、正確なものであるとはいえない。粗密性の考察については、すべての記事を日付レベルまで考察の対象としている、次節の記事密度に関する集計デ

表11 中国正史における平月率と閏月率（一）（『史記』～『後漢書』）

本紀・帝紀	範囲年月	即位前後	全平月	記事数	平月率	全閏月	記事数	閏月率	
『史記』 高祖	11・7	3・3	178	26	14.6%	5	0	0%	
	呂太后	15・6	1・0	198	20	10.1%	6	1	16.7%
	孝文	23・4	0・3	283	22	7.8%	8	0	0%
	孝景	15・0	0・0	180	37	20.6%	6	2	33.3%
	孝武	44・3	2・0	555	8	1.4%	17	0	0%
合計	109・3	2・3	1338	113	8.4%	25	3	7.1%	
『漢書』	高祖	11・8	2・3	167	109	65.3%	5	2	40.0%
	惠帝	7・6	1・0	102	25	24.5%	3	0	0%
	高后	7・8	0・0	92	18	19.6%	3	0	0%
	文帝	23・0	1・0	288	55	19.1%	8	1	12.5%
	景帝	15・9	0・0	189	56	29.6%	6	0	0%
	武帝	54・3	0・0	651	151	23.2%	20	1	5.0%
	昭帝	13・5	0・0	161	43	26.7%	5	1	20.0%
	宣帝	25・9	1・0	309	94	30.4%	9	0	0%
	元帝	15・8	0・0	188	59	31.4%	6	1	16.7%
	成帝	26・0	0・0	312	95	30.4%	10	2	20.0%
	哀帝	6・7	2・0	103	30	29.1%	2	0	0%
平帝	5・7	0・0	67	14	20.9%	2	1	50.0%	
合計	211・3	2・3	2562	749	29.2%	79	9	11.4%	
『後漢書』	光武帝	32・2	2・9	419	206	49.2%	12	6	50.0%
	孝明帝	18・7	3・0	259	83	32.0%	6	1	16.7%
	孝章帝	12・7	1・0	163	81	49.7%	5	2	40.0%
	孝和・孝殤帝	18・7	1・0	235	133	56.6%	7	5	71.4%
	孝安帝	20・0	0・0	240	168	70.0%	7	3	42.9%
	孝順・孝沖・孝質帝	21・4	2・0	280	149	53.2%	8	6	75.0%
	孝桓帝	22・0	0・0	264	159	60.2%	7	6	85.7%
	孝靈帝	21・9	0・0	261	173	66.3%	8	4	50.0%
	孝獻帝	31・7	1・6	397	127	32.0%	12	0	0%
合計	195・10	4・3	2401	1279	53.3%	72	33	45.8%	

注1 一部の皇帝紀、皇帝本紀については、皇帝即位前の王公在位期を範囲年月に含んでいる場合がある。

注2 各皇帝紀、皇帝本紀の数値においては、即位前後のものを含めて算出しているが合計については重複している部分は削除しているため、全体の合計は必ずしも各数値の総和とは一致しない。

注3 特に即位前後において、長い時間的な空白が存在している場合には、その期間は集計には含めていない。

表12 中国正史における平月率と閏月率（二）（『三国志』～『宋書』）

本紀・帝紀	範圍年月	即位前後	全平月	記事数	平月率	全閏月	記事数	閏月率
『三国志』武帝	30・3	1・0	375	140	37.3%	11	0	0%
文帝	6・6	2・3	105	58	55.2%	3	1	33.3%
明帝	12・8	2・0	176	99	56.3%	5	2	40.0%
三少帝・斉王	15・10	1・0	202	80	39.6%	5	0	0%
高貴郷公	5・9	1・0	81	40	49.4%	2	1	50.0%
陳留王	5・7	1・0	79	31	39.2%	2	1	50.0%
合計	76・1	1・0	925	448	48.4%	28	5	17.9%
『晋書』宣帝	11・9	11・1	274	23	8.4%	5	0	0%
景・文帝	13・9	2・0	189	43	22.8%	5	1	20.0%
武帝	25・0	1・0	312	223	71.5%	9	5	55.6%
惠帝	16・8	1・0	212	118	55.7%	6	1	16.7%
孝懷帝	6・3	2・0	99	61	61.6%	3	0	0%
孝愍帝	4・9	1・1	70	45	64.3%	2	0	0%
元・明帝	8・7	4・0	151	79	52.3%	4	3	75.0%
成・康帝	19・7	0・0	235	142	60.4%	7	1	14.3%
穆帝	16・9	0・0	201	132	65.7%	6	1	16.7%
哀帝	3・10	4・0	94	34	36.2%	1	0	0%
海西公	6・10	6・0	154	48	31.2%	2	0	0%
簡文・孝武帝	24・11	8・2	397	178	44.8%	9	2	22.2%
安・恭帝	23・10	0・2	288	59	55.2%	8	1	12.5%
合計	180・6	11・2	2300	1285	55.9%	67	15	22.4%
『宋書』武帝	22・9	0・1	274	105	38.3%	9	3	33.3%
少帝	2・2	2・0	50	15	30.0%	1	0	0%
文帝	28・9	3・0	381	215	56.4%	10	7	70.0%
孝武帝	11・7	8・1	236	123	52.1%	4	4	100%
前廢帝	1・7	4・1	68	16	23.5%	1	1	100%
明帝	6・7	9・1	188	74	39.4%	2	2	100%
後廢帝	5・4	3・1	101	55	54.5%	2	2	100%
順帝	2・0	3・1	61	23	37.7%	1	1	100%
合計	79・8	0・1	957	626	65.4%	30	20	66.7%

注1 一部の皇帝紀、皇帝本紀については、皇帝即位前の王公在位期を範圍年月に含んでいる場合がある。

注2 各皇帝紀、皇帝本紀の数値においては、即位前後のものを含めて算出しているが合計については重複している部分は削除しているため、全体の合計は必ずしも各数値の総和とは一致しない。

注3 特に即位前後において、長い時間的な空白が存在している場合には、その期間は集計には含めていない。

表13 中国正史における平月率と閏月率（三）（『南齊書』～『隋書』）

本紀・帝紀	範囲年数	即位前後	全平月	記事数	平月率	全閏月	記事数	閏月率	
『南齊書』	高帝	8・0	20・0	336	38	11.3%	3	2	66.7%
	武帝	11・7	3・0	175	96	54.9%	4	2	50.0%
	鬱林王	1・7	1・1	32	10	31.3%	1	1	100%
	海陵王	0・11	3・0	47	4	8.5%	0	0	0%
	明帝	4・7	12・0	199	32	16.1%	2	1	50.0%
	東昏侯	3・6	1・0	54	35	64.8%	1	1	100%
	和帝	1・6	3・0	54	16	29.6%	0	0	0%
合計	28・0	20・0	576	231	40.1%	11	7	63.6%	
『梁書』	武帝	49・2	3・3	629	392	62.3%	18	8	44.4%
	簡文帝	3・0	13・6	198	29	14.6%	1	1	100%
	元帝	6・2	8・1	171	51	29.8%	2	0	0%
	敬帝	3・0	3・0	72	28	38.9%	1	0	0%
合計	57・1	3・3	724	500	69.1%	22	9	40.9%	
『陳書』	高祖	10・2	7・10	216	57	26.4%	4	1	25.0%
	世祖	7・1	3・0	121	62	51.2%	3	1	33.3%
	廢帝	2・8	0・10	42	30	71.4%	1	1	100%
	宣帝	14・2	6・1	243	126	51.9%	5	3	60.0%
	後主	7・3	4・3	138	51	37.0%	3	0	0%
合計	39・9	7・11	572	326	57.0%	16	6	37.5%	
『隋書』	高祖	24・6	3・1	331	217	65.6%	9	6	66.7%
	煬帝	13・9	4・3	216	129	59.7%	5	2	40.0%
	恭帝	1・7	2・0	43	6	14.0%	0	0	0%
合計	39・1	3・1	506	352	69.6%	14	8	57.1%	

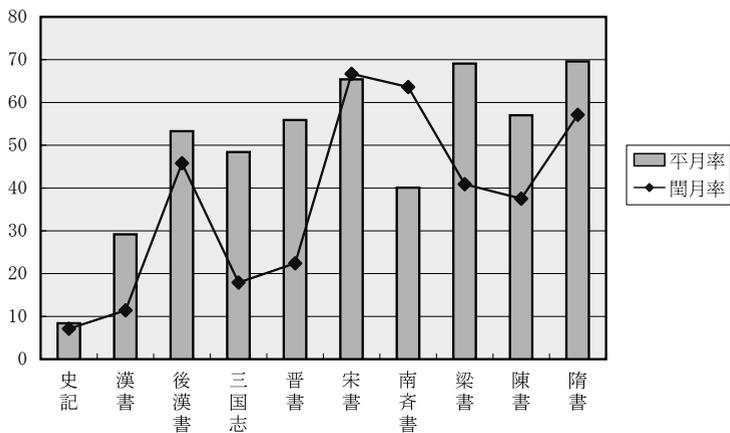


図11 歴代正史の平月率と閏月率（％）

ータを利用することが適切であるといえよう。

本節における平月率・閏月率とは、各本紀や歴史書における平月と閏月の性格の違い、また両者の現れ方の違いを比較するために導入した数値であり、前節でも触れたように、特に閏月というものの特殊性に着目することを大きな目的としたものである⁽¹⁸⁾。

本稿においては詳しい考察は行わないが、平月率も閏月率も古い時代の歴史書においてはその数値が低く、その後次第に高くなっていく傾向にあるといえる。こうした数値は、個々の歴史書の分量や時間的範囲の長さによって影響を受けやすい性質のものであるため、歴史書によって多少の数値の上昇・下降は見られるものの、⁽¹⁹⁾ 全体的に次第に高くなっていく傾向は、時代の変遷とともにより多くの歴史的な記録が、保存されるようになっていったことの表れであろうと考えることができるのである。

三、記事の密度とその暦日の精度

本節では集計データのうち、記事の密度（これを記事密度と仮称する）とその記事に付されている暦日の精度（これを記事精度と仮称する）を取り上げる。

記事密度とは一つの歴史書、或いは一つの本紀（帝紀）、

また複数の本紀によるグループにおいて、一ヶ月に配置されている記事数の平均値を算出したものである。例えば、ある本紀の時間的範囲が一〇年（一二〇平月）で記事の合計数が一二〇個であった場合には、その記事密度は一・〇〇ということになる。前節において既述したように、この数値によって各本紀や歴史書の粗密性の違いを比較することができるのである。

一方の記事精度とは一つの歴史書、或いは一つの本紀（帝紀）、また複数の本紀によるグループにおいて、各記事に付されている暦日の正確性を精度として数値化したものの平均値である。すなわち日付までが完備されている暦日は六・〇点、日付ほど正確ではないものの月名よりも詳しい暦日（例えば「中」、「他日」、「後餘日」などがこれに該当する）については四点、月名まで記されているものは三点、季節名までのものは二点、年数のみしか記されていないものは一点として、すべての記事における得点の平均値を算出したものである⁽²⁰⁾。

例えば、ある本紀に一〇個の記事があり、そのうち日付までが完備されているものが五個、月名までのものが三個、季節名までのものと年数のみのものでそれぞれ一個ずつだった場合には、合計得点は四二点となるから、その記事精度は四・二〇となるわけである。この数値によって各本紀や歴史書における暦日の正確性の違いを比較することができるのである⁽²¹⁾。

表14 中国正史における記事密度と記事精度（一）（『史記』～『後漢書』）

帝紀・本紀	範囲 平月	記事 合計	記事 密度	日付 記事	不定 記事	月名 記事	季節 記事	年数 記事	記事 得点	記事 精度	
『史記』 高祖	高祖	178	54	0.30	5	3	23	4	14	133	2.46
	呂太后	198	43	0.22	13	2	13	3	9	140	3.26
	孝文	283	43	0.15	9	2	16	6	8	130	3.02
	孝景	180	61	0.34	22	2	20	14	1	229	3.75
	孝武	555	52	0.09	7	3	3	15	20	113	2.17
合計	1338	253	0.19	56	12	75	42	52	745	2.94	
『漢書』	高帝	167	131	0.78	17	1	105	3	0	427	3.26
	惠帝	102	34	0.33	14	0	13	3	1	130	3.82
	高后	92	30	0.33	10	0	10	8	0	106	3.53
	文帝	288	70	0.24	11	0	46	10	1	225	3.21
	景帝	189	74	0.39	16	0	45	11	0	253	3.42
	武帝	651	238	0.37	45	0	126	62	0	772	3.24
	昭帝	161	66	0.41	13	1	35	14	0	215	3.26
	宣帝	309	120	0.39	30	0	71	14	2	423	3.53
	元帝	188	82	0.44	22	0	43	13	0	287	3.50
	成帝	312	129	0.41	44	1	63	15	3	490	3.80
	哀帝	103	42	0.41	11	0	22	4	2	142	3.38
平帝	67	27	0.40	7	0	10	7	0	86	3.19	
合計	2562	1043	0.41	240	3	589	164	9	3556	3.41	
『後漢書』	光武帝	419	338	0.81	207	0	85	15	24	1551	4.59
	孝明帝	259	127	0.49	69	0	37	2	15	544	4.28
	孝章帝	163	155	0.95	123	0	17	3	9	804	5.19
	孝和・孝殤帝	235	217	0.92	164	0	40	3	6	1116	5.14
	孝安帝	240	326	1.36	240	0	65	3	14	1655	5.08
	孝順・孝沖・孝質帝	280	280	1.00	213	0	51	1	9	1442	5.15
	孝桓帝	264	233	0.88	142	0	84	1	3	1109	4.76
	孝靈帝	261	236	0.90	97	0	116	8	11	957	4.06
	孝献帝	397	194	0.49	114	0	59	2	15	880	4.54
合計	2401	2106	0.88	1369	0	554	38	106	10058	4.78	

注1 一部の皇帝紀、皇帝本紀については、皇帝即位前の王公在位期を範囲平月（年月）に含んでいる場合がある。

注2 各皇帝紀、皇帝本紀の範囲については、即位前後のものを含めて算出しているが合計については重複している部分は削除しているため、全体の合計は必ずしも各数値の総和とは一致しない。

注3 記事の得点については、日付まで完備されている記事は6点、日付ほど正確ではないが、月名よりも詳しい記事（不定記事）は4点、月名までの記事は3点、季節名まで記事は2点、年数のみの記事は1点として集計している。例外については註20を参照。

表15 中国正史における記事密度と記事精度 (二) (『三国志』～『宋書』)

帝紀・本紀	範囲 平月	記事 合計	記事 密度	日付 記事	不定 記事	月名 記事	季節 記事	年数 記事	記事 得点	記事 精度
『三国志』 武 帝	375	172	0.46	8	3	139	12	5	506	2.94
	105	108	1.03	54	1	39	1	6	453	4.19
	176	172	0.98	111	0	55	0	3	834	4.85
	202	114	0.56	51	3	57	0	2	491	4.31
	81	78	0.96	55	1	18	0	2	390	5.00
	79	69	0.87	45	1	17	0	3	328	4.75
合 計	925	713	0.77	324	9	325	13	21	3002	4.21
『晋書』 宣 帝	274	46	0.17	4	1	20	1	10	100	2.17
	189	68	0.36	25	0	30	1	3	245	3.60
	312	357	1.14	229	0	112	1	9	1721	4.82
	212	206	0.97	139	0	58	0	6	1014	4.92
	99	111	1.12	81	0	24	0	3	561	5.05
	70	62	0.89	30	0	27	0	1	262	4.23
	151	167	1.11	100	1	44	0	6	742	4.44
	235	227	0.97	139	0	75	0	7	1066	4.70
	201	166	0.83	80	0	83	0	2	731	4.40
	94	57	0.61	36	0	15	0	5	266	4.67
	154	73	0.47	45	0	20	0	5	335	4.59
	397	288	0.73	195	0	72	0	12	1398	4.85
	288	275	0.95	172	0	83	1	11	1294	4.71
	合 計	2300	2103	0.91	1275	2	663	4	80	9735
『宋書』 武 帝	274	175	0.64	84	7	77	1	1	766	4.38
	50	42	0.84	29	2	3	0	3	194	4.62
	381	434	1.14	386	1	29	1	13	2422	5.58
	236	405	1.72	386	0	7	1	9	2348	5.80
	68	77	1.13	67	0	0	0	5	407	5.29
	188	254	1.35	235	0	2	0	12	1428	5.62
	101	125	1.24	116	0	3	0	3	708	5.66
	61	100	1.64	92	0	2	0	3	561	5.61
合 計	957	1612	1.68	1395	10	123	3	49	8834	5.48

注1 一部の皇帝紀、皇帝本紀については、皇帝即位前の王公在位期を範囲平月（年月）に含んでいる場合がある。

注2 各皇帝紀、皇帝本紀の範囲については、即位前後のものを含めて算出しているが合計については重複している部分は削除しているため、全体の合計は必ずしも各数値の総和とは一致しない。

注3 記事の得点については、日付まで完備されている記事は6点、日付ほど正確ではないが、月名よりも詳しい記事（不定記事）は4点、月名までの記事は3点、季節名まで記事は2点、年数のみの記事は1点として集計している。例外については註20を参照。

表 16 中国正史における記事密度と記事精度 (三) (『南齊書』～『隋書』)

帝紀・本紀	範囲 平月	記事 合計	記事 密度	日付 記事	不定 記事	月名 記事	季節 記事	年数 記事	記事 得点	記事 精度	
『南齊書』	高 帝	336	135	0.40	96	2	8	0	29	637	4.72
	武 帝	175	198	1.13	189	0	1	1	7	1146	5.79
	鬱林王	32	33	1.03	28	0	0	0	5	173	5.24
	海陵王	47	27	0.57	18	0	1	0	8	119	4.41
	明 帝	199	98	0.49	74	0	6	0	18	480	4.90
	東昏侯	54	96	1.78	92	0	3	0	1	562	5.85
	和 帝	54	58	1.07	54	0	1	0	3	330	5.69
合 計	576	645	1.12	551	2	20	1	71	3447	5.34	
『梁 書』	武 帝	629	775	1.23	700	6	55	2	12	4405	5.68
	簡文帝	198	75	0.38	50	0	10	1	14	346	4.61
	元 帝	171	124	0.73	90	0	23	0	11	620	5.00
	敬 帝	72	75	1.04	69	0	3	0	3	426	5.68
合 計	724	1049	1.45	909	6	91	3	40	5797	5.53	
『陳 書』	高 祖	216	188	0.87	142	13	26	2	5	991	5.27
	世 祖	121	162	1.34	151	1	5	0	5	930	5.74
	廢 帝	42	55	1.31	52	0	2	0	1	319	5.80
	宣 帝	243	313	1.29	300	1	5	0	7	1826	5.83
	後 主	138	133	0.96	119	5	4	0	5	751	5.65
合 計	572	851	1.49	764	20	42	2	23	4817	5.66	
『隋 書』	高 祖	331	583	1.76	558	2	12	0	11	3403	5.84
	煬 帝	216	370	1.71	342	7	8	2	10	2118	5.72
	恭 帝	43	22	0.51	17	0	1	0	4	109	4.95
合 計	506	975	1.93	917	9	21	2	25	5630	5.77	

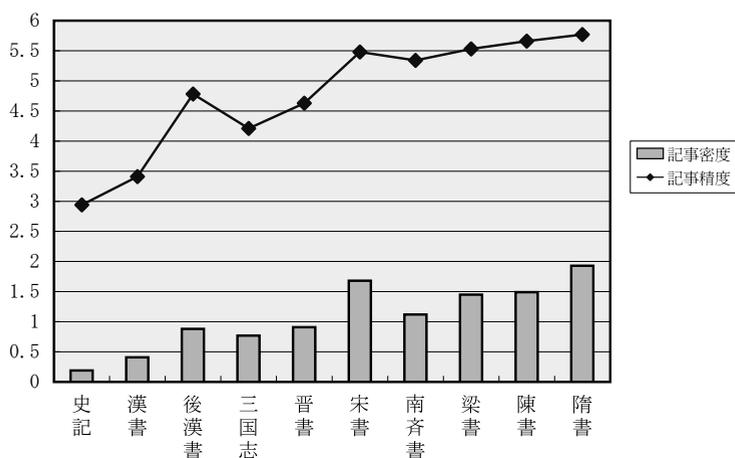


図 12 歴代正史の記事密度 (個/月) と記事精度 (点)

詳しい検討は次稿において行っていくこととしたいが、図12を見ても明らかのように、記事密度も記事精度も時代が降ることにより次第に数値が上昇していることが分かる。前節でも述べたように、このことは歴史書における暦日の編纂技術が、時代とともに向上していることを示している現象であると言えるであろう。

おわりに

本稿では、中国の正史における暦日データの集計を、表やグラフの形で提示してきた。しかし分量が多く、内容が多岐にわたるため、具体的な考察を行っていくだけの紙幅の余裕がなかった。そのため、論考としては内容の極めて乏しいものとなってしまったことを痛感している。次稿では中国正史における暦日の性質やその編纂過程の変遷を概観した上で、『書紀』の暦日データについても提示して、『書紀』の暦日の特徴について考察していくことにしたい。

中国では時代の変遷とともに次第に歴史書編纂体制や記録保存技術が向上していったことを反映して、正史の暦日データにおける各数値も基本的には向上、安定化していく。しかし中国正史の場合とは異なって、創作や人為的な設定を多く含んでいる『書紀』の暦日データにおいては、中国正史とは

違った独特な性質が見受けられるのである。

註

- (1) 拙稿『日本書紀』の暦日―暦法に適合しないいくつかの事例について―(『日本研究』第十六号、平成十五年)を参照。
- (2) 拙稿『日本書紀』の編纂における暦日の設定―暦法に適合しない事例を中心として―(『日本研究』第十九号、平成十八年)を参照。
- (3) 本稿において行っている中国正史の各数値の集計には、『中華書局出版本』(新華書店北京發行所發行、一九五九)を用いている。なお、本稿では扱えなかったが、今後は『南史』や『旧唐書』などの暦日データの集計も行う予定である。
- (4) 『史記』は大史令であった司馬遷が父の遺命によって著作したものであり、その作業は主として武帝朝に行われているが、現在普及している『史記』には後世の加筆が多く含まれており、特に孝武本紀に関しては前漢の元帝・成帝朝において大きな補筆事業が行われている。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』(燎原書店、一九八九)を参照。
- (5) 歴史書の対象範囲については、初代皇帝の即位前紀などもその範囲に含まれる場合があるため、その対象としている王朝の存在していた年代や年数とは厳密には一致しない場合が多い。
- (6) 『漢書』は後漢の班固によって編纂されたものであるが、その原史料となったのは父である班彪が著した『史記』以降の前漢の歴史をまとめ

た『後伝』である。『漢書』の『史記』と重複する部分は基本的に『史記』をベースとして編纂されたが、高祖と呂后の間に恵帝紀を立てるなど異なる部分も見受けられる。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(7) 『後漢書』は南宋の元嘉九（四三二）年頃に完成した范曄の著作で、その成立までには後漢の滅亡から二〇〇年以上が経過している。そのため当時は既に後漢代に関する歴史書として『東觀漢紀』や『統漢書』、『後漢紀』など多くのものが出回っていた。范曄はこの中から『東觀漢紀』をベースとして『後漢書』を編纂したが、志についてはのみは完成させることができず、後世に付加されたものである。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(8) 『三国志』は西晋の陳寿によって編纂されたが、『魏書』と『呉書』については王沈の『魏書』や魚豢の『魏略』、韋昭の『呉書』などといった先行する歴史書が存在していたようである。「蜀書」に関しては陳寿が自ら取材し一から完成させたものとされる。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(9) 『晋書』は唐の貞観二十一年（六四八）年に、房玄齡・李延寿らによって編纂された。東晋滅亡後、既に二〇〇年以上を経過してからの完成であり、そのため不正確な記述が多いとされ、古くより評価は低い。また、それまでは個人によって編纂されることが基本であった中国の歴史書において、初めて複数の人間による分担編纂方式を取り入れたことが最大の特徴といえるが、そのために前後矛盾する記述も多く生じており、か

えって評価を下げる一因となってしまっている。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(10) 『宋書』は沈約によって南斉の永明六（四八八）年に完成されたが、志だけはそれよりもやや遅れて成立している。本書は宋代において既に編纂されていた徐爰の『宋書』に依拠する部分が多いとされるが、北宋代までには既に散逸が見られるようになり、現行の『宋書』は唐代の李延寿が著した『南史』によって補筆されたものである。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(11) 『南齊書』は南斉代において編纂された沈約の『齊紀』や呉均の『齊春秋』などの歴史書に依拠する形で、梁代になってから蕭子顯によって編纂された歴史書であり、完成は六世紀前半である。しかし『南史』が世間に通行するようになってからは次第に用いられなくなり、現行の書物にはいくつかの誤脱が見受けられるようである。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(12) 『梁書』は陳の姚察の遺志を受け継いで、その息子の姚思廉が唐の貞観三（六二九）年に完成させた歴史書である。既に陳代には『梁史』と呼ばれる歴史書が流布しており、本書もこれを多く参考にしたと考えられているが、そもそもが官撰の史書ではなく、姚父子による私撰の歴史書であったという点に『梁書』の特徴があるといえる。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(13) 『陳書』は唐の貞観十（六三六）年に、それ以前に既に『梁書』の編纂を終えていた姚思廉が、続けて編纂を開始し、完成させた歴史書であ

る。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(14) 『隋書』の帝紀と列伝が魏徵によって完成したのは唐代前期の貞観十(六三〇)年であり、志に関しては梁、陳、北齊、北周を含む「五代史志」という形で顕慶元(六五〇)年に付加されたものである。その原史料となったものには隋代に編纂された王劼の『隋書』や、史官の手による『開皇起居注』と『大業起居注』などが挙げられる。詳しくは、神田信夫他編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、一九八九）を参照。

(15) 閏月の換算法は章法と呼ばれる暦法の法則に基づいて一九年七閏として行っている。すなわち平月は一九年に一九回存在するが閏月は七回しか存在しないため、一九を七で割った商(約二・七二)を閏月の割合にかければ平月の場合と同等な数値となる。厳密には章法に基づかない暦法が用いられている歴史書も存在するが、数値上は極めて微小な誤差であるので、この計算方法で問題が生じることはない。

(16) 歳首をどこに置くかについては、本文中に記した夏正(夏代に用いられていたとされる)や秦止の他にも、古くから殷正(殷代に用いられていたとされ、十一月(子月)を歳首とする)や周正(周代に用いられていたとされ、十二月(丑月)を歳首とする)が存在していて、春秋戦国時代には国によって様々な暦が使い分けられていた。秦は全国統一後に秦正を創出してこれを改めたのであり、漢の武帝に到って更に夏正が導入されたのである。これは五行循環思想に基づく政策の一つであると考えられている。詳しくは、平勢隆郎『新編史記東周年表』（東京大学

出版会、一九九五）や同氏『中国古代紀年の研究』（汲古書院、一九九六）などを参照。

(17) 註(15)で既述したように、閏月は平月に比べて出現頻度が少ない性質を持っているが、全体の中でいくつが記事に付されているかという記載率の場合に関しては、平月の条件と同じであるので、閏月率については各月率の場合のような換算は必要ない。

(18) 詳しくは次稿において論じたいと考えているが、筆者は『書紀』を含めた古代における歴史書の暦日において、閏月に注目することがその編纂体制、或いは記録保存システムを考察していく上で、非常に有効なものではないかと考えている。

(19) 例えば『南斉書』の平月率などは、周圜の歴史書に比べて極端に数値が低くなっている(図11参照)が、これは『南斉書』の時間的範囲が短いのに対して、暦日の粗略な初代高帝の即位前紀が非常に長期に及んでいるため、結果として全体の数値に影響を与えてしまったものである。

(20) 是歳条や月条、是日条などについても同様に扱っている。ただし、年数条の後に記されている是月条や、平月条の後に記されている是日条など、月名や日付がはっきりと特定できない事例については一点減点(是日条の場合は一点減点)として集計している。

(21) 各得点の中で日付までが完備されているものを六点と突出させたのは、それによって数値上の傾向の違いがより明瞭に表れるためである。

(付記)

本稿は二〇〇七年二月に、広島大学大学院社会科学研究所に提出した博士学位請求論文の一部を、再集計・再構成したものである。論文の作成及び審査過程では、指導教官であった佐竹昭先生をはじめ、榎原修先生、布川弘先生など多くの先生方に懇切な御指導と御教示を賜った。この場を借りて、深甚の謝意を表したい。

(広島大学大学院社会科学研究所修了生)